

[監修・編集] 元武蔵野女子大学教授

榎田 満文

いわゆる江戸文化を語るとき、遊廓と芝居はその重要な要素となり、欠くことの出来ないものです。明治31年に雑誌「世事画報」の臨時増刊号として発行された「新吉原画報」と「劇場図会」は、豊富な絵と詳細な記述により、吉原と劇場について、さまざまな情報を与えてくれる格好の文献です。この2冊を、カラー口絵をそのままに再現、解説（榎田満文）と事項索引等を付して、復刻しました。日本近代文学はもちろん、近世文学、文化史、演劇史、社会史、女性史等々、さまざまな分野で活用できる好資料です。

# 新吉原画報

# 劇場図会

『世事画報』

増刊

●定価：本体20,000円＋税

B 5 版上製／函入／約300頁  
ISBN4-8433-0999-0 C3074

ゆまに  
YUMANI  
SHOBUN  
書房



## 監修のことば

元武蔵野女子大学教授 槌田満文

『新吉原画報・劇場図会』は、画報雑誌『世事画報』（温古堂、明治31年7月～明治32年4月）の増刊『新吉原画報』（第一巻第四号、31年9月）と『劇場図会』（第一巻第八号、31年12月）を、一冊にまとめたはじめての復刻である。

樋口一葉の「たけくらべ」（明治28～29年作）は、吉原裏周辺が舞台となつている。たとえば第一章には「住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや」とか「おとつさんは芻橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ」などがあるが、これらの風物や風俗は今では見るすべもない。

しかし、吉原遊廓の沿革と景況を詳述した「新吉原画報」の口絵には、尾竹国観が小説とほぼ同時期に写生した「河岸の張見世」に小格子、「おはぐる溝」に芻橋、「下足番」に下足札を描いていて、名作の世界の奥行きを実感させてくれる。

「劇場図会」もまた、明治中期における劇場の内外を知る上で貴重な資料といつてよい。洋風のファサードを描いた尾形月耕の「歌舞伎座の外観」、尾竹竹坡による「芝居茶屋前」をはじめ、当時の観客も見られなかった「早拵及びせり揚」「奈落」「花道裏」などが竹坡、国観兄弟の筆で活写されている。

画報雑誌の草分け『風俗画報』（東陽堂、明治22年2月創刊）の後を追った『世事画報』は、わずか十六冊で終わつたが、増刊のこの二冊は『風俗画報』の増刊にひけをとらない内容を備えている。「明治吉原百科」と「明治劇場百科」といつてもよく、江戸・東京の歴史・風俗・文学などの研究者や愛好者に広くおすすしめしたい。

## 推薦します

### 明治の歌舞伎事典を推す

千葉大学名誉教授 服部幸雄

『劇場図会』は現代では稀観の一書である。この本は明治三十一年に出版されている。明治の劇界を代表する九代目團十郎、五代目菊五郎の晩年である。この本の内容は、江戸時代に出版された劇書―芝居に関する啓蒙的な解説書―の流れを受け継ぎ、劇場や芝居社会など、幕の内外に関する歴史、事実、用語、習慣などを丁寧に解説したものである。役者の役柄・等級・給金と契約・役者から出た風俗など、楽屋の内部・劇場内外の構造・鬘・大道具・小道具・鳴物・衣裳・化粧から幕内の通語・隠語に至るまで、当時の歌舞伎ファンや一般読者が知りたがっていた事柄を親切に説明している。

この書は明治三十年代における芝居社会に即した演劇百科事典の趣を備えている。本書の価値は、それぞれの項目に関して江戸時代のそれと対比しつつ彼我の相違点をあげている点にある。折しも演劇改良の荒波に洗われていた時代の中で、あわただしく変化していく劇界の様相を眺めつつ、いま書き留めておかねばと痛感しての編集だと緒言に言う。そこが貴重である。

「図会」と書名に謳つたのは、巻頭に十六葉の絵と当時活躍していた役者三十三人の銅版写真を掲載したのを指している。尾形月耕、尾竹竹坡、尾竹国観による劇場内外の図は、明治二十二年に創設された第一次の歌舞伎座（洋風の外観を備えていた）の内外がモデルになつていられるらしく、楽屋内のあちこちも写生的なタッチで描いてあるのがあるがたい。明治中期の歌舞伎について教えられるばかりでなく、時代の最大娯楽に密着していた当時の社会風俗を知る上でも有効な資料になつていと思う。

本書の復刊を喜び、江湖に推薦する次第である。

## 推薦します

### 尾竹兄弟の出発期

亜細亜大学教授 関 礼子

画報ものとしては先陣を切つた『風俗画報』と明治の一時期を伴走した『世事画報』の臨時増刊号『新吉原画報』・『劇場図会』の二巻が復刻されることとなった。江戸の悪所といわれる芝居や廓が近代に至つてどのような変貌を遂げたのか、その連続と断絶の二面を知る手がかりとして本誌は大変有益である。たとえば『新吉原画報』の目次に目をやれば、「吉原の西洋風附琉球娼妓のありし事」・「毒毒検査」などの項目があり、前者には維新後になつて初めて「三階四階の高楼」が許されたこと、明治十九年頃、ある楼で「娼妓の洋服」・「寝台」・「西洋皿」が使われたこと、後者には検徴の由来や「新吉原駆徴院規則」ならびにその運営方法などが記されて興味深い。

しかしなんといっても読者が惹きつけられたのは、これらの項目を視覚化した弱冠十八歳の挿絵画家尾竹国観、二十歳の竹坡による挿絵の数々であろう。長兄国一（越堂）とともに尾竹三兄弟といわれた彼らは、「劇場図会」でも画筆を競つているが、「日本堤上より吉原を望む」の一葉を寄せている梶田半古が、その後小杉天外「魔風恋風」や小栗風葉「青春」の新聞挿絵などで著名となるのに比し、大正期以後、挿絵画壇でも日本画壇でも不遇のまま後景に退いてしまう。その意味でも本誌は、東京進出後間もない尾竹兄弟の画業の一端を知るうえでも貴重なものとなるに違いない。

このほか、「劇場図会」には「東京各座来歴」、川上音二郎の略伝を記した「新俳優」・「劇場通言並に隠語」・「役者好の流行物」等々があり、帝都への歩みをつづける明治三十年代初頭の東京の都市文化の奥深くへと、私たちは「記事の精確と其絵画の写実」（本誌広告頁）によって手軽に分け入ることが可能となつたのである。

# 収録項目

## ★「新吉原画報」

〔世事画報〕第1巻第4号・明治31年9月



- 緒言 ●吉原遊廓の沿革 ●日本堤の事 ●見返り柳 ●吉原神社 ●逢初桜と駒繫松 ●旅人の井 ●大門の制札掟書 ●現今の大門 ●吉原へ行を丁へ行くといふ事 ●妓楼の等級 ●引手茶屋 ●附暴茶屋 ●現今の引手茶屋 ●十八軒茶屋の事 ●編笠茶屋の事 ●孔雀長屋の事 ●見番所 ●遊女の品種 ●禿の事 ●新造の事 ●遣手の事 ●亡八の事 ●楼丁の事 ●幫間芸妓の事附弾初
- の事 ●吉原の西洋風附琉球娼妓のありし事 ●女衞の事 ●娼妓の衣裳の事 ●遊女髪結ぶり ●遊女部屋の事 ●積夜具の事 ●総花の事 ●初会并見立 ●居続の事 ●お茶を挽くといふ事 ●敷始の蕎麦振舞の事 ●写真見立帳の事 ●娼妓の直段合印 ●三業帳面の附け方

- 遊女屋の引札 ●揚屋の差紙 ●廓言語 ●吉原娼妓の行ふ呪法 ●諸訳百もの語 ●臺屋の事 ●吉原の名物附行商、物賞 ●梅毒検査 ●無銭遊興 ●吉原通ひの人力車 ●三谷馬駄賃附 ●病中及び飲食の事 ●引の事 ●後朝の事 ●昼仕舞夜仕舞の事 ●落籍の事 ●外出及逃亡 ●遊女病死及情死の事 ●新吉原の菩提寺 ●仮宅の事 ●道中の事附突出しの事 ●夜店すがゞきの事 ●大尽舞の事 ●大黒舞の事 ●土手節の事附流行唄 ●年中行事 ●仲の町花植の事 ●燈籠の事 ●俄の事 ●酉の町 ●吉原七不思議 ●吉原の狂歌 ●吉原回祿記 ●名妓略伝

- 〔挿画〕積夜具(尾竹国観) / 日本堤上より吉原を望む(梶田半古) / 仲の町の茶屋(尾竹竹坡) / 俄及び燈籠、玉菊(尾竹竹坡) / 火事場(尾竹竹坡) / 京町二丁目の景況(尾竹竹坡) / 落籍(尾竹竹坡) / 鉄漿溝及び河岸の張見世(尾竹竹坡) / 顔洗ひ場及び朝帰り(尾竹竹坡) / 時廻り及び時の札場(尾竹竹坡) / 昼掃除(尾竹竹坡) / 検査日の景況(尾竹竹坡) / かん部屋(尾竹竹坡) / 道中(尾竹竹坡) / 引付(尾竹竹坡) / 昼遊び及び雨中の大門外(尾竹竹坡)



観) / 臺屋及び菓子屋(尾竹竹坡)

## ★「劇場図会」上巻

〔世事画報〕第1巻8号・明治31年12月

- 歌舞伎沿革 ●東京各座来歴 ●劇場の等級 ●大劇場火災年表 ●芝居の重なる座員 ●役者 ●芝居の構造 ●芝居内部の構造名目 ●狂言作者 ●楽屋頭取 ●開場の順序 ●振り見世 ●脚本の検閲 ●検分及役穴 ●正本・書拔・下座附 ●看板及番附け ●芝居の広告 ●芝居仕込金 ●役者給金 ●芝居の雑員 ●穴師 ●大道具 ●小道具 ●衣裳 ●粉粧 ●拍子木打方 ●鳴物 ●囃子



## ★「劇場図会」下巻

〔世事画報〕第1巻8号・明治31年12月

- 蔓 ●子供芝居 ●落語家講談師等の演劇 ●新俳優 ●俳優組合規則 ●劇場通言及隠語 ●名優の家系 ●古今座頭役者 ●芝居年中行事 ●声色つかひ ●役者好みの流行物 ●芝居風俗今と昔 ●歌舞伎十八番 ●狂言名題 ●俳優笑話 ●台辞 ●観劇の連中 ●立師 ●ちよぼ ●振付師 ●芝居褒め辞 ●芝居茶屋 ●手積金 ●敷物代

## ★解説(梶田満文)

★事項索引

★世事画報総目次(久源太郎)



- 〔挿画〕小国歌舞伎の図 / 歌舞伎座の外観の図 / 回り舞台大道具三方飾付の図 / 奈落の図 / 小道具の図 / 化粧部屋の図 / 化粧部屋の図 / 床山 / 頭取部屋の図 / 大部屋の図 / 囃子方の図 / 本読みの図



- 明治期の吉原と劇場を、図と詳細な記述で解説した興味深い同時代資料です。
- 多種多様な項目が解説されており、用語集としての性格を持っています。
- 文化・風俗史のみならず、日本近代初頭の格好な女性史の資料です。
- 精緻な彩色画をカラーで再現。重要な風俗資料であり、明治美術史上でも貴重なものです。
- 解説をはじめ、事項索引を付し、本文献を多角的に活用できるよう編集。

●特におすすめしたい方

日本近代文学、近世文学、文化史、演劇史、女性史、社会史、風俗史、世相史等の研究者、関連研究機関、大学図書館ほか。



本文見本 (66%に縮小)

神代の昔より和らぐ國の女文字、書き盡されぬ思ひの行を、込めし眼元も其まゝに移りぬらしき御り様は、逢ふも逢はぬも好不好、縁といふ字のつゝ知るべし文の手末の里の子なりしけの合のまいたつら香す

第卅六 娼妓の直段合印  
娼妓の直段合印は曲亭雜記に據るに享保中より細見記に大夫の來たるし皆△是なり時此時價六拾匁にて京の大夫といふもので來たれどもさのみはやらすしてやみぬ大凡享保より寶曆までの遊女の品階合印は△大夫井格子二人かふる△呼出し△つさ出し△座敷持△古金△公文△中夜△二合△打こみ山さんちや梅むちや△五寸局△並つばね及び屋△茶屋右保元△文△六年に至りてはじめて直段を書あらはしたり左の如し  
△大夫八拾匁△井格子六拾匁△呼出四拾五匁△散茶三分△文壹分△拾二匁△四寸△並局△茶屋六軒  
て現今細見記に用ふる所の直段合印を左に掲ぐ  
△入山形 定價金一圓二十錢 △白山形 定價金三十五錢  
△三ツ山形 定價金九 十 錢 △山がた形 定價金 三十 錢  
△三ツ山形 定價金六 十 錢 △山がた形 定價金二十五 錢  
△三ツ山形 定價金五 十 錢 △つが形 定價金二十 錢  
△二ツ山形 定價金四 十 錢

第卅七 三業帳面の附け方  
昔は貸座敷の臺帳、引手茶屋の元帳などの記載方に一定の式はなく隨て帳簿の不整理甚しく、其筋の調査等には不便少からざるより、去明治十七年二月三業元帳(取極)より各貸座敷及引手茶屋へ、帳簿記載方の規定を示し、現今猶ほ其例に倣ふと云ふさて其書式は左の如し

貸座敷簿の表紙には中央に「貸座敷元帳」とし其右へ「明治何年何月何日より何年何月何日迄」左に「何屋、何之某」と書す、用紙は西の内或は大牛紙にして、貳百枚以上に限る

貸座敷簿  
一此元帳は諸四ヶ年同某貸座敷に保存すべし  
一賦金は定期の通日々相納むべし  
一此元帳には客の姓名、娼妓引手茶屋の名及娼妓代酒肴價料等其外祝儀立券金共無誤記載すべし  
一娼妓代酒肴價料等は符牒を以て記すも妨げなしと雖も道高金に正字にて書すべし  
一此元帳の初葉へ其貸座敷に於て用ふる符牒を記し蓋亦符牒を取替候節、届出つべし  
一此元帳の外下附帳を用ふるも二帳(見世帳、外之帳)とす、其下付帳は元帳の檢印を受け必ず壹ヶ年間在置すべし  
一此元帳を以て賦金上納するものにして日々之計算左の書式に倣ふべし  
但壹ヶ月總計も此書式に準す

(書式)

二客數、  
一玉數、  
一内、  
一金、  
一金、  
一金、  
一金、  
一金、  
一實際數高、  
一此賦金、  
一胡妓高、  
一金、  
一總高、  
一娼妓代、  
一席料何個、  
一酒肴飯小物代、  
一藝妓揚代、  
一祝儀其外立券、  
一祝儀高、  
一金、

関連企画のご案内

[監修・編集] 槌田満文 元武蔵野女子大学教授

# 風俗画報

Ver.2 <CD-ROM版 全11枚>

Windows版 ●定価本体220,000円十税 (分売不可)

「風俗画報」の膨大な情報の森を迷うことなく歩き、活用するために、全号を画像としてデジタル化。題名・著者名・地名・年月・キーワードなどから該当部分を開ける詳細なデータベース機能を完備。今回のVer.2では、検索速度がVer.1の数十倍に。Windows 98/Me/2000/XP WindowsNT 4.0にも対応した最新版です。



〒101-0047  
東京都千代田区内神田2-7-6  
TEL.03 (5296) 0491  
FAX.03 (5296) 0493  
http://www.yumani.co.jp/  
e-mail eigyou@yumani.co.jp

ゆまに書房 Tel.03 (5296) 0491/Fax.03 (5296) 0493 年 月 日

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

新吉原画報・劇場図会 — 『世事画報』増刊—

●定価:本体20,000円十税 ISBN4-8433-0999-0 C3074

取  
扱  
店

ご  
注  
文  
書

お名前(ご住所)

TEL ( )